日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報　第11号
発行日　平成23年3月20日
事務局　日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6－10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail:donkawai@pearl.ocn.ne.jp

第16回ショパン国際ピアノコンクール

進化続ける日ポ・サロンと共に。

ＮＰＯ法人　日ポ・サロン　理事長
澤　瀉　徹　郎

日頃は日ポ・サロンの活動に多大のご協力を賜り誠に有難うございます。
日ポ・サロンの活動も発足して１１年目に入り、益々充実の活動をすることが出来ました。これも会員皆様の参画意識と献身的で地道なご協力の成果だと大変嬉しく思っております。

年初の事業計画が予定通り遂行できたのも、会員皆様の協力あってのことと感謝しています。日ポ・サロンの最大の目的である留学生招聘も第９期生受け入れが実現し、２０１０年１０月よりマルタ・ヤクボフスカさんが神戸大学で研鑽を積んでいます。１月には前駐ポーランド共和国特命全権大使、田辺隆一氏の講演、４月には春の遠足、そして１０月には「ポーランドとショパンを訪ねる旅」と銘打って、５年ぶりのポーランドの旅が実現しました。現地の心温まる親切心に触れ感動して帰ってきました。１１月にはポーランド舞踊団「ルッツ　ＬＵＺ」関西来訪観光ホストに献身的な協力も頂きました。そして、１１月２３日には世界的ピアニスト、フィリップ・ジュジアーノ氏のピアノ・リサイタルが実現し、フェニックス・ホール超満員の会場で、ショパンの調べを存分に楽しむことが出来ました。

会員皆様の温かいご支援、ご協力に支えられた結果だと、厚く感謝しています。日ポ・サロンの活動が両国親善、文化の交流に少しでもお役に立てれば大変嬉しいです。

今後とも会員皆様の一層のご支援、参画を何卒よろしくお願い致します。

総　会　・　講　演　会

２０１０年1月３０日(土)
於/ＫＢＳ「桐の間」
会員３６名・お客様２名・留学生７名
計４５名出席

『最近のポーランド情勢・日本とポーランドの関係　ポーランドの見どころ・ショパン生誕200年』

講師　田　邊　隆　一　氏
前ポーランド共和国特命全権大使
現特命全権大使（関西担当）

「幸運のシンボル」

１８世紀から１２３年間周辺国に国土を分割されたポーランドの人々は、何度も蜂起するが失敗し多くがシベリアに追放された。１９１７年、ロシア革命後の混乱でシベリアにおけるポーランド人孤児・児童の生活は飢えと寒さのなか悲惨な状況に追い込まれていた。

当時、独立を回復したばかりのポーランドからの支援要請に応じたのが唯一日本政府だった。２０年から２２年にかけ１歳から１６歳の７６５人の子供たちを救った。存命者はいないと思っていたが、昨年マリア・オルトフェノバさん(95)との出会いが実現した。シベリアから大阪に逃れ看護を受けた後、離ればなれだった両親とワルシャワで再会した経験がある。

「日本の人が優しくひざの上にのせてくれたことや看護婦さんによくしてもらったことを覚えている」という。日本と日本人は彼女にとって「幸運のシンボル」。覚えている歌があるといって「もしもし亀よ」と懐かしそうに口ずさんだ。

現在、ポーランドには１３００人の日本人がいる。オルトフェノバさんは「そんなにたくさん」と驚いた表情を浮かべると、大きな声で「バンザイ」と叫んだ。

いつまでもお元気で国交９０周年となった両国の関係がさらに深まるのを見守ってほしい。

（平成２１年６月１８日　日本経済新聞朝刊）

「石清水八幡宮・背割堤お花見」

２０１０年４月６日（火）
会員２３名・お客様１０名（内ポーランド人５名）
留学生６名　　計３９名参加

「お花見に参加して」

カロリナ・カミンスカ

４月６日、日ポ・サロンからご招待をいただき、魅力的な春の遠足に参加いたしました。幸せなことに、その前の数日間も、後の数日間もお天気はあまり良くなかったのですが、この日はとても春らしくて暖かかったのです。遠足は、背割堤桜並木の見物が中心でしたが、その他にもいろいろな別の興味ある場所に行く予定が立ててありました。

まず、皆が揃ったところで、ケーブルに乗って、男山の上にある駅に降りました。そこから最初に石清水八幡宮の中に特別に入れていただき、宮司が行った祈りに参加して、神社

見物を始めました。石清水八幡宮の彫刻や塗った色は全部深い意味があったそうでとても綺麗でした。その上、神社は歴史を持っていて、極めて印象的なところでした。見事な建築を目にしてから、隣の公園を歩きつつ、緩やかな坂道を上っていました。暫く後で山頂の展望台に着いて、足元に広がる山並みや街の景色を楽しみながら、くつろぎもできました。ちょっとした霞のせいで遠い所まで見られなかったのに、眺めは素晴らしかったです。

男山を降りて、次の松花堂庭園という花と緑で満ちたところへ到着しました。庭園で鑑賞できるものの中から私の記憶に特に残ったのは、水琴窟でした。穴に耳を近づけると、落ちている水は音楽のように聞こえることにびっくりして、なんと魅力的な楽器であるのだろうと思いました。その他、私の目を引いて感動させたのは、水面に浮かんでいて、輪の形の中に花びらを敷き詰めた、まるで花の絨毯のような作品でした。

散歩が終わってから、彩り豊かで美味しい昼ごはんをいただいて、大変ごちそうになりました。４つの部分に分けた箱の中に刺身やエビをはじめ、いろいろなおかずが入っていました。手間がかかって綺麗に作った和風料理を食べながら、「日本料理は目で食べる」という諺を思い出します。私たちが食べたのは、松花堂弁当という春の京料理でした。

遠足の最後の行き先は、背割堤桜並木でした。そこの光景は言い切れないほど魅力的で、息をのむほど美しかったです。なぜなら背割堤桜並木というのは、川に沿っておよそ１．５キロの長さで、満開の桜並木はトンネルのようでした。ほれぼれするような満開の桜の下に入ると、まるで別の世界に移動されたかのような感じがしました。桜の並木を歩いて、花に包まれながら、陽気でゆっくり過ごしました。

春の遠足の時の深い感動は、綺麗な光景を目で楽しむだけでなく、日ポ・サロンの方々とポーランド人の友達と会って、楽しく話をする絶好の機会でした。４月６日のお花見のおかげで素敵な思い出が作れました。みなさんどうもありがとうございました。

アガタさん送別会

２０１０年８月３日（火）
ＫＢＳにて
会員２２名　留学生４名出席

『日本文人の自殺について』

アガタ・ストツェレッカ
（神戸大学国際文化学科）

日本に来ることが出来て、日ポ・サロンの方々に言葉で表せない感謝をしています。私は日本に来る理由は日本文学についての卒業論文を書くことでした。卒業論文のテーマは近代における日本の作家の自殺のことです。特に太宰治と三島由紀夫の自殺の理由を比較するつもりです。そのため、色々な研究をして社会的な自殺原因も理想的な原因についても勉強した研究について、少し話したいです。

自殺は人類文明とともに発生し、今に至るまで自殺が存在しない社会はない。人類学では、原始人の群れに既に自殺があり、少なくとも４千年も前の自殺の遺書が近年エジプトで発見された、という確かな証拠を提出している。人類の歴史全体を通じてみれば近代以来、文人もしくは作家と呼ばれるような人たちの自殺は最も多いように思われる。文人・作家の自殺は、ある時代における文人・作家の社会的環境が大きく変化し、彼らの心のバランスが崩れたことを反映しているとみられる。ところで自殺とは一体どういうものか？なぜ文人・作家に自殺者が多く出るのか？そして、なぜ近代に入ってから、日本人の文人・作家には目立って多くの自殺者を出し、自殺者は増えたのか？今日のスピーチでは、自殺の社会的要素を主な視点として、近代に起きた日本の文人・作家の自殺について議論を展開してみたいと思う。

我々は孤立的に存在しているのではなくて、社会という関係体系の中に共存している。個人の生活は、個人の自由意志によって支配されているかのように見えているが、実際、色々思想的に行動的に社会というものに関連し合い、互いに制約されている。文人・作家の自殺も大抵、家庭という社会を構成する細胞から、文壇という小社会、国内社会乃至国際社会に至るまで、色々な事柄に深く関わっているから、その自殺を研究するには、何よりもまず、それに着眼しなくてはだめだと思う。この意味から言えば、フランス社会学者デュルケムは、誰よりも先に社会的要素に着眼した「自殺論」の重大な意義は否定できない。

人間を徹底的に「社会的存在」として考察していくこの社会学者（デュルケム）の眼は、人間の生というものがいかに集団生活によって影響され左右されるものであるかを鋭く看て取っている。言い換えれば、自殺はこの行為に走る人間の生きてきた集団生活に関わる要因を抜きにしては十分に説明され得ないということなのだ。

今日の目からみればデュルケム学説には、いくつかの問題点があることも否定できない。因みにデュルケムの研究は、１９世紀のヨーロッパ向けで、東洋人の自殺のケースには必ずしもぴったり当てはまるとは限らない。それにデュルケムは、自殺する人間を受動的なものとして固定的に扱っているように思われ、自殺者の主観的能動性を見逃したのではないかと思われる。ここでは、まずなぜ日本の文人・作家の自殺は多発であるか。

創造は創造者に最高度の自由を感じさせる活動である。最高度の自由とは、恐怖の外に身を置くものであって、霊感というものに捉われている時、恐れるものは全然ないと言っても過言ではない。そんな時、彼らは天の寵児のように自らの命を絶った同業者を見下げていた。が、時が経つにつれて、その自分自身も我が命を絶つ決意をする時が訪れる。三島由紀夫はそのよい例である。彼は３０歳の時、「私は自殺する人間が嫌いである。自殺する文学者というものをどうも尊敬できない」放言していながら、１５年も経たないうちに彼自身も「自殺する文学者」となった。

また、川端康成も「末期の眼」の中で、「いかに現世を厭離するとも、自殺は悟りの姿ではない。いかに徳行高くとも自殺者は大聖の域に遠い」という大言壮語を発した何年か後に、やはりガス自殺を遂げた。あらゆる芸術家の中で、作家は最も傷つきやすい。文人・作家は社会の脈動に敏感で、同じ苦悩でも並みの人よりもっと強く感じられ、自分の人生を小説と混同しやすい。

何事も集団で一致して行われる日本社会では、もっぱら個人的な職業としての文人・作家は、当然ながら自殺しやすい立場にある。文人・作家は一人ぼっちの作業で孤独になりやすいが、孤独は自殺に密接につながったものである。浅原六郎氏は、牧野信一の自殺の原因を分析した時、作者の持つ孤独地獄は、作者にしか解らないものである。作者はお互いにその哀しみを持っている。それをお互いに持ち合わせながら、慰め合うことのできない世界に作者の孤独地獄はあると書き、個々から見れば、孤独は自殺の温床と言えそうではないか。

社会的現実に姑息的、妥協的態度を取らずにとことんまで突き詰めることは自殺に走りやすい。人間は大抵、いわゆる阿Ｑの「精神勝利法」があるなら、どんな事態が起こっても自分で悩みを解消させることができて、自殺せずにすむわけである。現代に比べれば、近代の文人・作家の中には、少なからず社会的現実に姑息的、妥協的態度を取らずにとことんまで突き詰めるような人がいた。彼らは、ｙｅｓとｎｏのどちらかをあくまで守り通す性質がある。例えば芥川の場合、未来はプロレタリア階級のもので自分の出る道はないと決め付けて「ぼんやりとした不安」を感じた。それに新しい時代に、彼の友人であった久米正雄や菊池寛などは、通俗小説の中から活路を見つけ、大きな成功を獲得したのに、芥川だけは頑として、いわゆる「純文学」の陣地に立てこもり続け、少しも妥協しようとはしなかった。一作ごとに練りに練った挙句、彼の文学創作は枯れてしまうことが避けられないことになった。政治的にも文学的にも明るさを見出せないという事態に彼は自然に自殺の道を求めたくなる。　太宰治の場合は、なかなか自分の信条を変えようとせず、自分の堕落を大目に見られず、「失格」した人間として、死ぬよりほか道がないと決め付けていた。僕たちはそれ以後、彼ほどに共感させられる文学を未だ知ることなく、彼ほどに純粋で真摯な作家を未だ発見することができないのです。

一方、昔から日本列島の並々ならぬ生活環境、頻発する台風、地震、火山噴火などの自然災害による死亡の突発性と不可抗力は日本人に仏教の「人生無常」の観念を強めた。この観念の支配の下で、日本人は切に生命を把握し、生を大切にする一方、死亡を尊敬したり、崇拝さえする。日本人の理念には、「菊と刀」に書かれているようにに、二律背反な面がある。「仕事の鬼」と言われるほど懸命に働く一方、また思う存分娯楽を楽しむ。極端に自我を抑圧する一方、また極端にストレスを紛らすことをする。日本人の民族的心象と民族精神は、このように矛盾だらけである。

日本のこうした特異な思想史と価値観によって、自殺を制限する宗教観はないと言えそうである。自殺は、ある特定の場合の問題解決の手段として、かなり多くの日本人の心の中に根を下ろしてきた。これはさらに、「死はすべてを浄化する」という贖罪思想にまで繋がってきた。「引責自殺」も多く出る。因みに日本人には、昔からの古い自殺の伝説がある、日本語から外国語に入ったものとして、どの言語の辞書にも有名な二つの言語があるという。それは「切腹」と「神風」である。この二つの単語とも自殺に関わるのである。確かに日本ならではの文化である。

日本における自殺は、愛する者にとっては悲劇であることに変わりはないが、文化的には恥辱なことであるとか、宗教的な嫌悪感を伴わないことも事実である。それどころか、自らの手でこの世に別れを告げることには、むしろ崇高さに近い感情が存するように思われるのである。

西洋人は、精神が錯乱したり、絶望したり、もしくは利己的でさえあったりした者が最後に行き着く場として自殺を捉える傾向がある。それに対し、上に述べた原因で、日本は文化的に全く特異な性向を持っており、特定の場合の自殺という考え方は、日本文化にもっと深く根ざしたものである。

昭和時代になってから、芥川龍之介の自殺は、精神的要因以外に主として彼自身が言ったように、未来社会への「ぼんやりとした不安」がその要因である。牧野信一の場合も、その本人の神経衰弱も原因の一つであるものの、「２・２６事件」発生の９ヶ月後、国内の右翼勢力の台頭が牧野の社会への絶望をもたらさないとは断言できるであろうか？　ましてや、牧野の場合、生計困難というデュルケムの見逃した原因もあると思う。有島、芥川、牧野の自殺は、確かに社会的原因に関わってはいるが、社会的統合力が弱くなったという明確な証明がみられないではないか。

太宰治の自殺は１９４８年に起こったのであるが、その当時の社会はまだまだ「特需」とか「神武景気」とか「岩戸景気」とかいう経済飛躍の気配は毛頭見せていなかった。焼け跡や闇市などの敗戦のシンボルともいうべきものがなお残っていた。特に、侵略戦争を起こして「御国」のことを無限神聖なものとし、人間の個人の自由と利益は、殆ど全部奪い取られてしまう戦争中の思想への統制さえなければ、敗戦後、その反動としての堕落鼓吹に全力を尽くした無頼派が生ずることは、まずない筈である。したがって、太宰治などの退廃と堕落もあるはずがない。あくまで追求すれば無頼派の退廃、堕落と社会への絶望の根源は、やはりこの「大東亜戦争」にあるのではないかと思う。勿論、戦後の滅茶苦茶な社会で、他の人はなぜ自殺しなかったのかという点からすると、太宰自身には、確かに彼自身の原因も認められる。

社会的要因を最も著しく表現したケースは、原民喜の自殺である。研究者たちはいろいろ民喜の精神的要因を過大視して、その社会的原因を見逃した。虚無的要素も否定できないが、米、ソなどが核実験を起こそうとして社会に核の脅威をもたらしたため、彼は戦争に対しての反感、抵抗と恐怖から発する人類の前途への絶望などが主な原因となって自殺したのである。当時の情勢が核戦争になりそうな危機一髪のものでなければ、原民喜は、ひょっとしたらもう少し生き延びただろうと思う。ところで、７０年代初めの三島由紀夫と川端康成の自殺にも社会的要因があるが、事情は大分違うものだと思う。なぜかと言うと、太宰治の自殺までは、社会はまだいろいろ不満足な点が多かったが、７０年代以降、平和憲法の下で一歩ずつ民主化へと歩むとともに、人民の生活も世界の経済大国になったくらい豊かになった。社会的歪みが既になくなったとはもちろん言えないが、大きな流れとして、日本は基本的にある程度、自国の世界での位置と果たすべき使命が分かるようになって、平和を求めるために、世界の人民との心の触れ合いを求めようとしている。それなのに、このような社会に不満を懐き、自殺を敢行したケースは何と言っても反社会的な行為と言わざるを得ない。三島の場合は、過ぎ去った「大日本帝国」の伝統を追求し、パフォーマンスをやってのけた自殺であったし、川端の場合、社会の発展、進歩が自分と全然関係ないという現実社会への不満から、美への発掘をする中で仏教的涅槃に憧れる虚無的生死観を懐き、「功成りて名遂げた」時、涅槃的な自殺を遂げた。この二人とも輪廻転生の夢を見ていたのかもしれない。

さて、社会国家乃至世界という視角で歴史的に全面的に文人の自殺を見れば、その自殺者には、それぞれ違った生理的原因とか心理的原因とかがあるにもかかわらず、その共通となる主な原因は、社会的要素となっている。これまでの多くの研究者、特に精神医学者たちは、自殺者の生理状態や心理状態に拘り過ぎて、自殺者を国内乃至国外の社会環境の中に置くことをあまりせずに、自殺文人の個人的生理的原因を過大視したりして、「神経衰弱」や「狂気」や「非社会的」とかいう結論を下す傾向がある。文人であるだけに、神経は繊細で自分の置かれたマクロ・ミクロ社会環境に、並みの人の倍くらい敏感であるから、ごく個別のケース以外に、大抵の文人の自殺は、社会的原因と切り離すことが出来ず、社会学的に説明できそうである。

日本の近代までは、心中や武士の切腹が多かったが、近代に入ってから、文人作家の自殺が著しく増える。現代では、自殺する作家がますます少なくなるのは、近代以来の文人・作家たちほど、真剣に社会への使命感に燃え、真剣に人生を模索することをしていないことを物語っていて、これもかなり思索に値するのではないかと思う。

日本での留学が実現して

マルタ・ヤクボフスカ
（神戸大学国際文化学科）

私はヤクボフスカ・マルタと申します。マルタとよんで下さい。日ポ・サロンの方々のおかげで、去年の10月に神戸大学で留学する為に日本に来ることができました。みんなに本当に感謝しています。

私はワルシャワ出身です。４年前にワルシャワ日本学科に入学しました。日本学科を選んだ理由は日本の文化、漢字、社会、なにより日本の美学に興味を持ったからです。はじめに日本の美術の中で江戸時代の浮世絵が一番面白いと思いました。中学生の時、世界で有名な作品が載っている美術の本で、初めて浮世絵の木版画を見ました。斬新で完璧な構図や強い色、細部の美しさから他の絵画より優れていると思いました。本当に感動しました。

日本学科で学んだ日本美術の授業から、浮世絵の木版画についての知識を深めることができました。その時、他の日本の木版画運動が気になりました。これは大正と昭和に起きた運動で、江戸時代の浮世絵の技法を発展させた新版画という運動です。これについて私は卒業論文を書きました。修士課程１回生の時、特に月岡芳年、小林静観、鏑木清方など、明治時代の木版画作家に関心を持つようになりました。これから、日ポ・サロンのおかげで、これらの芸術家を中心とした木版画の研究ができるのを楽しみにしています。

今、私は４ヶ月日本にいます。今まで色々な面白い経験がありました。日本に到着した瞬間から、見るもの全てが興味深いと思いました。景色が美しくて、きれいな神社がいっぱいで、ポーランドと比べて、電車の時間が驚くほど正確です。でも私にとって一番ビックリしたのは、日本人はとても親切だということです。いつも何か困ったら、日本人が一生懸命に私を出来るだけ助けてくれました。たとえば、日ポ・サロンにピアノ・コンサートに誘っていただいた時、大阪の梅田駅からコンサートホールまでの道が全くわかりませんでした。時間がぎりぎりで、本当に困りました。ある日本人女性に道を尋ねたところ、その人も道を知りませんでした。でも「分かりません」だけでなく、私のために、道が分かる人を探してくれました。また次の日本人は、私と一緒に１０分も歩いて、しかもビルのドアまで私を送ってくれました。ポーランドでは、よくそんな時「あそこだ」と言って、手で大体の方向を指すだけです。本当にびっくりして、うれしかったです。

しかし、変だと思ったこともありました。初めて日本の食べ物を食べた時、本当にまずいと思いました。うどんだったのでしょう・・・今、思うとポーランドでだし汁は肉を使いますが、日本は魚を使うので変な味に感じたと思います。そして買い物に行った時、私が全然知らないものが多く、電子辞書を使って買い物をしました。一番ビックリしたのは蓮根でした。日本で初めて見ましたし、とても怪しく見えました。これをどうやって食べられるか想像できなくて寮の韓国人の友達に相談しました。２ヶ月後、日本の料理に慣れて本当に好きになりました。今、何でも食べられます。

私が面白いと思ったこともありました。たとえば、若い日本人の女性のファッションです。夏でも冬でも短いスカートやショーツを穿いていて、だぼだぼのセーターを着ています。偽のまつ毛も人気があります。そして、多くの女性は電車の中で化粧するのもビックリしました。またその時、本当に大きな鏡を使います。ポーランドと比べて４倍くらいです。正直に言って、これはちょっと不便だと思います。もう一つ、私がビックリしたのは、多くの日本人は神道と仏教のことをよく間違うということです。たとえば、大晦日は京都で過ごしました。まず、八坂神社に行ってその周辺を巡ってから清水寺に行きました。清水寺に到着したのは１８時頃だったので、残念ながら入れませんでした。２３時頃にもう一度八坂神社に行ったのですが、身動きがとれないくらい人がいっぱいでした。その時「除夜の鐘」が聞きたくなりましたから、鐘がある寺に移動しようと思いました。時間があまりなかったので八坂神社を急いで出て、ボランティアスタッフに一番近い寺を聞きました。３人のボランティアスタッフは全員、私が寺を探していると言っているにもかかわらず、八坂神社ばかりを指さしていて困りました。おそらく彼らは全然、寺と神社の区別ができていないのでしょう・・・本当にビックリしました。ちょっと話続けていて５分後、私が「神社は神道、寺は仏教」と説明したところ、ようやく１人のスタッフが理解してくれて、道を教えてもらいました。でも、私はもう気が変わってしまって、結局よく知っている清水寺に行くことにしました。１５分ほど、雪の中を走って、ぎりぎり、除夜の鐘に間に合いました。ハプニングだらけでしたが、最後に除夜の鐘を聞けて本当に嬉しかったです。

また、今まで、日ポ・サロンの方々に京都と奈良を案内していただいて、最近、素晴らしいお正月を過ごしました。その時、伝統的なおせち料理を食べて、初めて百人一首を楽しんで、本当にいい思い出ばかりです。これから研究を進めるだけでなく、花見、梅雨や文楽、歌舞伎、能、色々な伝統的な芸術などを体験してみたいです。色々なところに行って、日本のことをもっと知りたいと思います。これまでたくさん助けてくれてありがとうございました。困ったことも色々ありましたが、みなさんのおかげで楽しく過ごせています。これからもよろしくお願いいたします。

魅惑のポーランドとショパンを訪ねる旅

2010年　10月15日(金)～23日(土)　会員23名参加

錦秋のポーランドを旅して

赤阪　賢

ヘルシンキの乗り換えで寒さに震え上がったが、ワルシャワではさいわい陽光に恵まれ、折から公園や街路の樹木は黄葉に彩られポーランドの旅を満喫した。ショパン生誕２００年の記念の年で、街はポスターや垂れ幕・幟などで埋め尽くされているとの予測ははずれ拍子抜けした。同行の皆さんはショパンについて造詣深い方々ばかりで、なかでも、最年少のＨ嬢には連日ピアノ演奏を披露して頂き、すっかりショパン三昧の日々を過ごすことができた。ショパンの生家では特別にミニコンサートが用意され、カロリーナさんの「舟唄」の演奏などに耳を傾け、至福の時間を過ごすことが出来た。旅程の最後に自由行動で聖十字架教会を訪れた私たちのグループは、第二位に入賞したことを報告に来て取材を受けていたオーストリアのヴンダーに遭遇して、幸運にもサイン入りのショパンの楽譜（マズルカ）をもらうことができた。その為、ウィーナーズ・コンサートでは優勝者アブデーエワよりもヴンダーの演奏に肩入れして聴いてしまった。今回のショパンコンクールでは、日本を含むアジアの演奏家は最終予選に入らなかったが、その模様は毎日「ショパン・エクスプレス」で報じられ演奏曲のＣＤとともに市内要所で無料配布されるなど、大会の手際の良い組織運営ぶりには感心するばかりだ。

ワルシャワ旧市街のほか、各地で数々の世界遺産にも接することができた。ヴェリチカの岩塩鉱山の地下教会のシャンデリアや古都クラクフの歴史豊かな街並みなどに深い印象を受けた。クラクフ郊外のアウシュヴィッツ博物館も見学し、あらためてホロコーストの悲劇の現場に立ってみて、非人間的な行為に手を染めてしまう人間という存在を再認識する機会になった。世界各地から足を運ぶ多数の若者たちの姿に圧倒されたが、現地ガイドの中谷剛さんによると、ここまで足を運ぶ日本人の数が減少気味ということだった。

ポーランド名物といえば「もてなしの風習」ということを聞いていたが、実際数々の場面で肌身に感じることがあった。

まず、カヴェンダ歌舞団の民族舞踊を鑑賞した際にも、現代的な振り付けのダンスまで目まぐるしく踊りの演目を披露するにもかかわらず、歓迎の意を表して少女たちが満面の笑みをたやさずにいることで思わず胸が熱くなった。ワルシャワ大学図書館のお茶室では、見事に和服を着こなした女子学生のお点前の優雅な振る舞いに感服させられた。ワルシャワ大学の日本語学科の学生た

ちとの懇談会では、自己紹介をかねて志望の理由を語ってもらったが、アニメなど現代日本の文化に幅広い関心を示す学生が多く、先生方は苦笑気味。皆が元気いっぱいで積極的な勉学意欲をしめしており頼もしく感じた。旅行社のアンナさんの心のこもったガイドぶりに頭が下がる思いだったが、最後にはメンバー全員を格式あるカフェ「E.Wedel」に招待までしていただき本当に感謝の言葉もない。

黄金の秋・ショパンの旅

澤　山　寛　子

幼い頃から聴いていた母の弾くショパンのマズルカは、私の愛する音楽の心の原点です。

初めて訪れたワルシャワは「黄金の秋」。黄葉の並木を通って到着したホテルの夕食は、温かい「グリーンアスパラガスのスープ」で始まりました。たっぷりのクリームスープにうれしい心が震えました。翌日は早速ワジキ公園に案内して頂きましたが、早朝は２℃だったそうです。有名なショパン像を見上げる足元には赤い薔薇が咲いておりました。ショパン像の前では、毎日曜日ピアノコンサートが開かれるそうです。

ランチは、ホノラトウカというショパンの肖像画の前にお花があふれんばんかりに供えられ、壁には美しい絵が描かれたお店で牛肉のソテーにマッシュルームソース、付け合せは柔らかく炒めたビーツとマッシュポテトでした。食後に日菜子ちゃんが見事なピアノ演奏、英雄ポロネーズを弾いて下さいました。午後は、バスでジュラゾバ村のショパンの生家へ。ライ麦、大麦などの畑の続く道を走って、黄葉に囲まれた生家に着きました。

小さなサロンでカロリーナさんの舟歌やノクターンを静かに聴いて、心安らぐひとときを過ごしました。バスでワルシャワに戻り、お夕食は立派なレストラン「Tradycja」で。白麻に手刺繍の地厚なテーブルクロスに、大ぶりのグラスの盛られたチューリップの見事さに圧倒されました。ウサギのパテに始まり、野鴨とレタスのサラダ、真っ白いベルベットのようなスープ。メインはお魚を選びました。１７日はワルシャワ大学を訪問し、お茶室「懐庵」でアガタ・バリンスカさんのお点前でお茶を頂きました。和敬静寂のお茶の心を学びながら、日本をより深く学ぼうとしておられる姿に感心しました。

その夜は、ホテルのコサックという特別のお部屋で「晩餐会」。日本語学科の岡崎教授をはじめ、エヴァ教授やお茶のお点前をして下さったアガタさんもご一緒に、和やかなお食事を楽しみました。

ポーランドの方々がこんなに日本や日本語を愛して下さっていることをはっきり知ることが出来ました。晩餐会のメニューは、前菜に茄子とトマトの重ね焼き、ハーブのよく香るオニオンスープ、メインはやわらかい子羊のローストにポテトパイが添えてありました。グラスにチェリーが沈められた上にマスカルポーネ、チョコレートの香りのする美味しいデザートで締めくくられました。

１８日はバスで６時間。クラコフに向かい、途中ヴェリチカ岩塩工場を見学。その大きさにびっくりし、彫刻や礼拝堂、広間のシャンデリアの立派さに眼を見張りながら２キロ半を歩いて見学しました。約１時間半でした。古都クラコフでは、Wierzynekという立派なレストラン。ピロギの浮いたコンソメスープ、ポークフィレをマリネしてお料理したというメイン、デザートは三角形のアイスクリームでした。デザートの前に日菜子ちゃんのピアノ演奏を聴かせて頂きました。珍しい銘柄のピアノだったので私ももつい、出来心で触らせていただきました。

１９日は、アウシュヴィッツ収容所を見学。専門歴史学者中谷さんの淡々と語られる解説に目の前の「残された物」に、胸つぶされる思いでした。２時間の見学の後、クラコフに戻り、ランチは水餃子に似た名物の「ピロギ」。市街を散策される方、ホテルに戻る方、自由に午後を過ごしました。

夕食は、ホテルで真っ白のサワークリームの浮いたトマトスープ、メインのビーフシチューには大きなポテト・ロステイが添えられてありました。煮込み料理の多いお国と思いました。デザートのチョコレートケーキも見事に大きいものでした。

２０日はバスでワルシャワに戻る途中、ランチはレストランで「ジュラビナ」というパンケーキにリンゴンベリーのジャムが添えてありました。食後、ヤスナ・グラ修道院を見学。お顔に２本の傷跡があるマリア様を拝まんと、たくさんの信者さんが列をなしていました。ワルシャワへの帰りのバスでは、往路と同じようにコーヒーを入れて下さったり、アンナさんからチョコレートバーが配られたり、ショパンの生涯のテープを見たり、曲を聴いたりの楽しい時間を過ごしました。４時の予約で、ショパン博物館に入場。写真、絵画、楽譜、ピアノ、そして驚いたのは、ハイテクの技術を駆使してヴィジュアルに、そして耳でも楽しめるようにという素晴らしい「博物館」でした。

ショパンの愛した花の香りがほのかに漂う部屋、デスマスクの置かれた「死の部屋」には何の音も聞こえないのでした。ショパンは実にこの世に生きた人だったことをひしひし感じました。今年４月に完成したそうです。

お夕食は、Alegloriaで、キャベツのすっぱいスープ、グリルチキンにデジョンソースをかけたもの、デザートはビックリするくらい大きなコーヒーケーキでした。このレストランも見事な生花が生けられておりました。

２１日の午前中は自由行動。私は夫の親しいお友達の娘さんに案内して頂いてボレスワビエツ陶器、ヴェデルのチョコレート、食材の市場にお買い物に行きました。午後、全員でワルシャワ大学を訪問、日本語学科の図書館に並べられた沢山の蔵書に驚きながら学生たちと懇談のひとときを過ごしました。若い時に学べるだけのことを学んで下さい、と願いながら大学を後にしました。

この夜、「ショパン国際ピアノコンペティション」の入賞者コンサートを国立劇場で聴きました。今年優勝したのはロシアのユリアナ・アヴドエーヴァさん、２５歳の女性。８時からのセレモニー、１８００人の観衆の待つ中、４位から順番に演奏があり、優勝者は最後にコンツェルトを演奏しました。なんといってもショパンの生まれた国に世界中から集って、ショパンの曲だけで競うコンクールですから、ポーランドだけでなく世界中の注目を集めたでしょう。

夢中で過ごした旅の毎日でした。私には、見たもの、聴いたもの全て思い出になりました。

蘇った日菜子――ショパンへの旅

柳　谷　郁　子

この度は河合様をはじめ日ポ・サロンの皆様には、私ども夫婦もですが、ことに孫の日菜子をめぐって言葉に尽くせぬお世話を賜わり、心より御礼申し上げます。

それにつきましても、サロンの皆様のそれぞれの見事なご教養と力量、その上のあふれるばかりの愛情深さに、さすがの思いしきりでございました。

只今、中学三年生の日菜子は、母親がピアノ教室をやっておりますのでその音の中で育ち、三歳頃より自然にピアノを弾くようになりました。小学生三年生で神戸国際学生音楽コンクール・ジュニア部門（小学校三年生～高校三年生）の最優秀賞と兵庫県芸術賞をいただき、本来ですと、その時点でその筋の優れた先生に師事させていただくところでございますが、今もって母親の指導の下におります。

優しく抱き取るべき母親と厳しい音楽の教師の両立は成り難く、案の定の思春期の反抗期。娘である母親と孫である日菜子がそれぞれに苦しむのを見る私どももまた切なく、心痛む日々を送っておりましたところへ戴いた、かねてより高島様にお願いしていましたこの度のご案内でした。必ず連れていってあげると約束していたショパン・コンクールのガラ・コンサートです。日菜子が暗い迷朦から脱出する願ってもない機会でした。

受験期の生徒さんたちを抱えて離れられない娘のかわりにというよりも喜び勇んで、ジジババの孫孝行の旅になりました。出発の日が折悪しく「灘の喧嘩祭り」当日と重なっていましたため、悩みに悩みましたが、潔く断念、例年寄って来て下さる幾十人かの方々に手紙で事情をお伝えし、家を閉めての決行となったのでした。

日菜子は、すっかりポーランドが気に入ったようです。黄金の秋。豊かな杜と共存する歴史ある美しい街の風景。巨大なショパンの像に象徴される全市ショパンへの思いを刻むワルシャワ。音楽がこれほどの力を持っていることに衝撃を受けた彼女の顔色は変わっていました。そして日本人にも劣らない、いいえ、それ以上のきめ細かな気配りと労を厭わない優しさで私たちを魅了した、アンナさんやガイドさんたち。
この街に住みたい、絶対ここへもう一度来る、と日菜子は何度も呟きました。

キュリー夫妻の写真の前で、「こういう素敵な結婚をするのよ。キュリー夫人はね、恋愛もし、結婚もし、子どもも産んで育てて、ノーベル賞を二度も受賞しているのよ。その娘のイレーヌもノーベル賞を受賞してるの。あれかこれかではなくて、あれもこれもなの。百年以上も前の人よ。
ましてや今の時代、日菜子さんもそういう豊かな人生を生きなくちゃ」と私は言い、素直にうなずいて写真におさまった彼女に、涙ぐむような安堵を覚えたのでした。

アウシュヴィッツでの経験もまた、ひときわ彼女の思惟を深くしたことと思います。

大人の方々に混じって唯一人の十代。皆様に有り余るお気遣いと温かなご愛情でつつんでいただきました。厚かましくもレストランやホテルの其処此処でピアノを演奏させていただき、お心のこもった拍手をいただきました。その上、みんなで応援するとまで仰言って励まして下さいました。
重ねて心から感謝申し上げます。

今後のことは日菜子次第でございますが、いずれにしましても、この度の経験は彼女にとって何ものにも代え難い人生の宝物になるとものと存じます。何よりも大人の皆様の温かい愛情に包まれた記憶は彼女の生涯を包み、決してゆがんだ方向へ向かわせることはないと確信しております。

只今、バレーボールの世界選手権で日本とポーランドが対戦、大接戦の末日本が勝ったところです。対戦中、ふとどっちを応援しようかと迷い、思わず苦笑いたしました。

日菜子さんより

ポーランドの街は本当に素晴らしい街でした。私はこの街に行って、大切なことをたくさん学んできました。
その学んできたことを一生わすれないようにしたいです。５年後、ショパンコンクールに出て、ステキな音色をポーランドの街に響かせたいです。

水本日菜子

ポーランド・ルッツ舞踊団来日

２０１０年１１月５日（金）～７日（日）

ポーランド少年少女舞踏団「ルッツLUZ」を迎える。「浜松ポーランド市民交流友の会」の影山美恵子様の働きかけから日ポ・サロンの会員とその友人の１０家庭がホストファミリーとなり、団員の少年少女２２名、引率者３名を受け入れました。５日は会員とその友人宅でホームステイ、６日は京都東山ユースホステルで宿泊。

ポーランド舞踊団を迎えて

樋　口　晴　子

２０１０年１１月５日（金）京都平安神宮前のみやこメッセ横の小さな公園で浜松の影山さんに引率された２５名の団員の方々とお会い致しました。１３歳から１８歳の子供たちと先生と共に歩いて知恩院、八坂神社、清水寺を観光案内しそこで子供たちは、ホストファミリーの方々と一緒に帰路につきました。

わが家は１６歳の可愛いニーナとキンガの二人の女の子を預かりました。京阪京橋まで主人が車で迎えに来ていて、上手に「こんにちは」と挨拶。主人は緊張して「Nice meet to you」を言うのが精一杯、つい笑ってしまいました。早速帰宅後、夕食の支度、４人で楽しく片言の英語で夕食を済ませ、ベッドルームとお風呂を案内。主人がシャンプー、コンディショナー、ボディシャンプーを英語で書いてくれたり、トイレのウォシュレットのボタンにも英語で書いて貼ってくれていたり、私の知らない主人の一面を見たような気持ちでした。私たち夫婦は英語が話せないので、ハートとボディランゲージで会話する始末です。かなり疲れている様子でしたが、二人で楽しくくつろいでいたので、返って二人にしたのがよかったのかな？と思います。

翌日６日、二人からお土産をいただき、私たちからもプレゼントを渡し、９時に自宅を出発し近鉄奈良駅へ。駅で団員の方々と会いホッとした様子でした。集合の後、食事処「花鹿」にて昼食、皆さん上手にお箸を使っているのにビックリ！食後、舞踏団代表のお礼の挨拶後、皆さんで「森へいきましょう」を日本語で歌って下さり、感動しました。そこから東大寺へ移動し、原さんのご配慮で大仏殿副院生佐保山さんの案内で、なかなか入ることの出来ない登壇に入れて頂き、間近で大仏を見ることができました。留学生の方々の通訳で会話を楽しみながら、奈良公園から興福寺を通って近鉄奈良駅へ。短い１泊２日のホストファミリーのお役を終え、別れる時を迎えました。初めての貴重な経験をさせて頂き感謝の気持ちで一杯です。

ポーランド舞踊団とともに

カタジナ・ヴィスポルスカ

「２０１０年１１月５日、６日にＬＵＺというポーランドの舞踊団が関西に来るので、ガイド・通訳をしてくれませんか」と河合様に頼まれました。初めは少し緊張しましたが、舞踊団のグループの人も協力してくれた日ポ・サロンの皆さんもとても優しい人たちだということがすぐ分かりました。ポーランドの舞踊団は２３人が１２歳～１９歳の若い子たちで、ポーランド人の先生が３人、そして日ポ・サロンのメンバーが５人でした。

京都の歴史について話しながら清水寺へ行きました。ポーランドの子たちは清水寺への道が気に入ったそうで、特に古い旅館がきれいだと言っていました。私も何度も京都見物をしたことがありますが、京都周辺で生まれた日ポ・サロンの方々のお話はとても興味深く、勉強になりました。

それから舞踊団のメンバーを２～３人のグループに分け、グループごとにホストファミリーの家に行きました。私は２人の子供と一緒に神戸に住んでいる日ポ・サロンのメンバーの家に泊まり、晩御飯の後、舞踊団の横浜公演のビデオを見ました。

６日は奈良観光をしました。私の個人的な意見ですが、奈良は日本にある古い町の中で一番きれいな町だと思います。最初は日本式のレストランでおいしい昼ご飯を食べました。レストランには、たたみ、ふとん、日本式の飾りがあり、とても雰囲気のいい場所でした。それから東大寺へ行きました。ただ普通に見て回るだけだろうと思っていたのですが、お坊さんがガイドをしてくださったのでびっくりしました。お坊さんは東大寺の歴史について話してくださり、私はポーランド人のグループのために通訳しました。これは「鑑真和上とその日本文化への影響」という修士論文を書いた私にとっては大きな楽しみでした。東大寺は鑑真和上が日本に着いてから数年間泊まったお寺です。しかし、最も深く印象に残っているのは、奈良の大仏の戒壇に入って、大仏の傍に立ったり、大仏を触ったりしたことでした。とても感動しました。これは珍しい経験だそうです。日本人も普段はそういう経験をあまりしないそうです。日ポ・サロンのメンバーのおかげでそのような貴重な体験ができ、心より感謝しております。

ホストファミリーの高校生より

岸　さゆり

ポーランドの二人の女の子が泊まってくれたのは、本当に本当に短い時間だったけれど、一緒に寝て、浴衣も着てとても仲良くなれた。奈良はポーランドの人もとても楽しそうにして喜んでいたから嬉しかった。私もこの機会を得て、さらに世界に興味を持った。

今、起きている東北関東の地震のことを心配してくれて、メールをくれた。とても嬉しかった。

まだ、つながっている気がして、とてもよい関係です。本当によい機会でした。

ピアノリサイタル・フィリップ・ジュジアーノ

２０１０年１１月２３日（火・祝）
フェニックスホール

Philippe Giusiano

プログラム

ショパン作曲　５つのマズルカ　作品７

作品　7-1　変ロ長調　7-2　イ短調　7-3　ヘ短調
7-4　変イ長調　7-5　ハ長調

ショパン作曲　ピアノ・ソナタ　第1番　ハ短調　作品4

シューマン作曲　謝肉祭　作品9

1.前口上　2.ピエロ　3.アルルカン　4.優雅なワルツ
5.オイゼービウス　6.フローレスタン　7.コケット
8.応答・スフィンクス　9.蝶々　10.踊る文字（ASCH-SCHA）
11.キャリーナ　12.ショパン　13.エストレッラ
14.再会　15.パンタロンとコロンビーヌ　16.ドイツ風ワルツ
17.インテルメッゾ：パガニーニ　18.告白　19.散歩　20.休息
21.フィリスティンたちに対抗するダビッド同盟人の行進

スクリャービン作曲　ピアノ・ソナタ　嬰ト短調　作品19「幻想」

From Poland

日ポ・サロンの皆様

日ポ・サロン様には、ますますお元気のこととお喜び申し上げます。この度は、日本美術技術博物館マンガの、洪水で受けた被害箇所の修理のために多大なるご寄付を頂きまして、大変にありがとうございました。マンガ創設者アンジェイ・ワイダとクリスティーナ・ザフファトヴィッチ、またマンガ博物館役員及び全職員を代表致しまして、心からのお礼を申し上げます。

この度、頂戴いたしましたご寄付、そしてマンガ救済チャリティーオークションでの収益金は、合わせて１０万８千ズウォティとなりましたことをここにご報告させて頂きます。この金額は、水の汲み上げ、浸水箇所乾燥作業、破損箇所の修理に使用させていただいて、平常通りの業務再開に向けて職員一同、日々努力をしている毎日でございます。

日ポ・サロン皆様のご厚志なしにはここまでたどり着くことはできなかったと深い感謝の気持ちで一杯でございます。
どうぞこれからも、日本美術技術博物館を温かく見守っていただけますよう、心からお願い申し上げます。
日ポ・サロンの皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げております。

2011年2月14日

日本美術技術博物館　館長
ボグナ・ジェフチャールク・マイ

（10万8千ズウォティは約300万円。円高の為、1ズヴォティは30円換算。
当サロンより10万円寄付致しました）

橋本　新吾様

この度は、歌川広重の「東海道五十三次」（全五十五景）をワルシャワ大学日本学科にご寄贈くださいまして、誠にありがとうございました。

日本学科として、広重の復刻版を数点所蔵しておりますが、このようにまとまった全集の形で持つことは夢でした。おそらくは叶わない夢だろうと思っておりましたが、思いがけなく橋本様のご厚意によって、このように実現しましたことを心から喜んでおります。

江戸時代の文学や芸術に興味を持つ学生も多く、この江戸期を専門にしている研究者もいます。彼らのとってこのような生の資料に接する機会を持つことがどんなに大きな意味があるか、私も日本史を研究していることから、よく理解できます。
大袈裟ではありませんが、将来ワルシャワ大学日本学科が続く限り、この浮世絵集は学習や研究に役立ってくれることと信じております。　終わりにあたりまして、橋本様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

2010年12月

ワルシャワ大学日本学科長
エヴァ・パワッシュ・ルトコフスカ教授

（橋本新吾様はポーランド旅行に参加した新入会員）

日ポ・サロンの皆様方へ

このたびの東日本大震災に際し、ワルシャワ大学日本学科の教官および学生を代表して、日本国民の皆様に心からお見舞いを申し上げます。また、不幸にも犠牲者となられた方々には心からの哀悼の意を表します。

今後、被害があまり広がらないように、また被災者の方々が一日も早く、日常の生活に戻れますようお祈り致しますとともに、災害からの復旧が一刻も早くなされますよう祈念いたします。

March 16 2011

ワルシャワ大学日本学科長
エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授

関西在住日ポ・サロン後援留学生（2010年度）

アグネシカ　マージェフ	民族博物館大学院大学
アガタ　ストツェレッカ	神戸大学国際文化学部
アドリアンナ　ヤポルスカ	大阪大学大学院
カタジナ　ヴィスポルスカ	神戸大学文学部大学院
カロリナ　カミンスカ	同志社大学
パウリナ　ザレムスカ	同志社大学
マルタ　ヤクボフスカ	神戸大学国際文化学部
マルチン　タタルチュク	京都大学文学部大学院
ヤクブ　マルシャレンコ	大阪大学大学院

編集後記

２０１０年を振り返って

河合康子

２０１０年の会報のゲラ刷りを読み返しながら、昨年１月の総会時の決算報告を思い出した。

あの頃は、もう活動資金が少なくなっていて、留学生を受け入れられるかどうかも不安であった。だがこうして皆さんからの投稿や報告を見ると、今まで以上に活動出来た年であったことを、改めて認識し、かつてなかったほどの驚きと感動と感謝の年であったと思う。

２５人の舞踊団員のホームステイなど、受け入れられるかどうか不安だったが、お世話して下さった会員の人たちから、良い経験が出来たと喜んで頂き、とても有難く嬉しかった。

１９９５年のショパンコンクール最優秀者であったフィリップ・ジュジアーノ氏のピアノリサイタルにしても、一人の会員との幸運な出会いに始まり、聴きに来て下さった人たちから絶賛されることになった。

洪水に見舞われたクラコフのマンガ博物館に援助金を送れたこと、ポーランドへの旅行が縁で、橋本さん所有の広重の東海道五十三次の復刻版の版画をワルシャワ大学に寄贈できた事など、どれ一つをとっても会員の皆さんやその周辺の人々の温かい支えがあったからに他ならない。

最後にポーランド旅行の背景をお伝えし、ここで出会ったヤボルスキー一家に心からお礼を申し上げたい。

３度目の「ショパンコンクールと錦秋のポーランド」の旅はまさに波乱万丈であった。出発を２週間後に控えて、２５人の旅行代金の半額をすでに支払っていたポーランド最大手の旅行会社ＯＲＢＩＳが倒産した。そのとたんにコンサートのチケット、ホテル、バス、ガイド、予約の要る観光スポットなどの全てがキャンセルになったことを知り、茫然とし、「誰か助けて！」と思わず叫んでしまった。その叫び声が届いた先は、阪大大学院に留学していたアダさんのお父さんだった。彼、アンジェイさんは“Ｐｒｏｆｉ”という旅行会社のオーナーだった。

春の花見の時、アダさんから父が旅行会社をしているから、何かあれば相談して下さいと言われ、ワルシャワとクラコフでお勧めのレストランを紹介、予約してもらうことにした。そのことが幸いしたのだ。航空券はＪＴＢに取ってもらっていたので、コンサートのチケットさえ取れれば何とかなると考え、すぐにアンジェイさんに電話をし、チケットの確保を頼み、２週間で全てがＰｒｏｆｉによって引き継がれることになった。出発３日前に２人のキャンセルがあったが、関西空港で参加者２２人の喜びと期待にあふれた顔を見たときの感激は忘れられない。

ワルシャワ空港に着くとアダさんのお母さんの出番だ。彼女、アンナさんは３０年間ＯＲＢＩＳに勤めた経験があるそうだ。彼女はいつも笑顔を絶やさず、出迎えから見送りまで全てを引き受けてくれた。その行き届いた細やかな心遣いは日本人にも真似が出来ない程で、ホテルや観光スポットでの交渉は全て滞りなく、私たちは何の心配もいらなかった。彼女のおかげで、ポーランド８日間の旅は、かつて味わったことのない心温まる思い出深いものになった。

さらに幸いなことに、アダさんの姉、アシアさんとご主人はワルシャワで開業中の弁護士で、ＯＲＢＩＳに関する訴訟を引き受けてくださり、全てを任せて帰ることが出来た。関西空港に帰り着いた時の皆は、満足と感謝の気持ちでいっぱいだったと思う。

ヤボルスキー家の皆様、有難うございました。私たちは貴方たちの温かい誠意に心から感謝しています。

会員の皆様には、これからも「日ポ・サロン」を温かく支えて下さいますようご協力をお願いいたします。

２０１１年　３月